

平成二十七年年度

日本近世文学会春季大会

・大会プログラム

・研究発表要旨

期日 五月三十日(土)・三十一日(日)・六月一日(月)

会場 東京藝術大学音楽学部

(五号館二階五十一〇九教室)

〒110-8714 東京都台東区上野公園二二一八

- 一、出欠の葉書を**四月二十四日(金)**必着でお出しください。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。
- 一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(日本大学生物資源科学部)へお申し出ください。
- 一、大会経費は、参加費千円、懇親会費六千円です。
- 一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇〇一四〇一三二六〇七七四、口座名「日本近世文学会春季東京藝術大学大会」)で、**五月一日(金)**までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。

- 一、大会二日目(五月三十一日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙で送金ください。
- 一、大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。
- 一、三日目(六月一日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。
- 一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は「近世文藝」の末尾に綴じ込んでいます。
- 一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会春季東京藝術大学大会事務局

東京藝術大学音楽学部言語芸術講座 杉本和寛

〒110-8714 東京都台東区上野公園二二一八

電話 〇五〇―五五二五―二三七三(直通)

メールアドレス sugimoto@ms.geidai.ac.jp

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。
さて、平成二十七年春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十七年四月十日

日本近世文学会春季大会会場校代表 杉本和寛
日本近世文学会事務局代表 倉員正江

〔事務局連絡先〕

〒252・0880 神奈川県藤沢市亀井野一八六六
日本大学生物資源科学部 一般教養

国語・国文学研究室(2)

電話 ○四六六―八四―三七八一

FAX ○四六六―八〇―一〇八二

e-mail info@kinseibungakukai.com

〔会場〕東京藝術大学音楽学部 〔行事〕

第一日 五月三十日(土)

委員会 会(二二・二〇～一三・四〇)

委員会会場 五号館地階大会議室

大会受付(一三・〇〇)

開会時間(一三・五〇)

研究発表会(二四・〇〇～一六・四五)

研究発表会会場 五号館一階五―一〇九教室

1 日持上人の異域布教説と加藤清正について―『鷹峰群譚』の検討を端緒として―

立正大学(非) 小此木 敏明

2 本国寺版をめぐる諸問題―『録内御書』を中心として―

日蓮正宗教学研鑽所 堀部 正円

3 本阿弥一族と灰屋紹益―吉野太夫の逸話における「父」と「一門」をめぐる―

北海道大学(院) 工藤 隆彰

4 天理図書館蔵『源氏物語打聞』の再検討―北村季吟とその後裔の古典学をめぐる―

大阪大学(院) 宮川 真弥

5 賀茂季鷹の人脈と名声―季鷹宛書簡を踏まえて―

同志社大学 神谷 勝広

日本近世文学会賞授賞式・総会(一七・〇〇～一八・〇〇)

懇親会(一八・三〇～二〇・三〇)

懇親会会場 上野精養軒 三階 桐の間

〒110・8715 東京都台東区上野公園四一五八

電話 ○三―三八二―二二八二(代)

第二日 五月三十一日(日)

大会受付(九:30)

研究発表会 午前の部(10:00~12:15)

研究発表会会場 五号館二階五-10九教室

6 『太平記演義』の二面性―冠山の不遇意識を軸に―

7 大枝流芳の位置―香道を中心に―

8 西村遠里と蕃山学―『居行子』『雨中問答』を中心に―

9 藤森弘庵『春雨楼詩鈔』と幕末の出版検閲

昼 休 み(12:15~13:30)

編集委員会会場 五号館四階五-410教室

研究発表会 午後の部(13:30~16:15)

研究発表会会場 五号館二階五-10九教室

10 「祇園祭礼信仰記」考―人形浄瑠璃における秀吉像をめぐる―

11 芍薬亭長根の読本における「勸戒」―『坂東奇聞濡衣雙紙』を中心に―

12 『報仇高尾外伝』における為永春水の創作態度

13 『とはしぐさ』考

14 幕末福井歌壇における橘曙覧の位置

閉 会(16:20)

第三日 六月一日(月)

文学実地踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

※会場にて『近世文藝』九〇号を無料配布いたします。

上智大学(院) 丸井貴史
総合研究大学院大学(院) 武居雅子
九州大学(院) 吉田宰

東京大学大学院学術研究員 佐藤温

日本学術振興会特別研究員(PD) 原田真澄

川村学園女子大学 山名順子

早稲田大学(院) 長田和也

国文学研究資料館博士研究員 紅林健志

広島大学 久保田啓一

日持上人の異域布教説と加藤清正について

―『鷹峰群譚』の検討を端緒として―

立正大学(非) 小此木 敏 明

日持は、日蓮の六人の高弟(六老僧)の一人に数えられるが、異域へ布教に赴いたという伝承を持つ人物である。一七三三年に刊行された『鷹峰群譚』は、日持が朝鮮へ布教した痕跡の一つとして『清正記』の話を紹介している。それは、加藤清正が朝鮮に出兵したおり、高麗の隊列の中に題目旗を見たというものである。しかし、『統撰清正記』などに該当記事は見当たらない。『鷹峰群譚』が引く『清正記』の記事はどこから出たのか。また、なぜ日持の異域布教と清正の朝鮮出兵が結びつけられたのかを考察する。

『鷹峰群譚』の引く『清正記』の話に対して、戦後の日持研究は踏み込んだ調査をしていない。しかし、明治二十七年六月二十五日の『日宗新報』五三三号には、山田安栄が鍋島藩の史書『直茂公譜』(正しくは『直茂公譜考補』か)の中に該当記事を発見した、という記事が見出せる。確かに『直茂公譜考補』巻第七「加藤清正於兀良哈摺王子」には、文禄の役で清正が兀良哈の「延臈」の城を攻めた際、城中にいた「六老僧日持ノ末流」が旗を合せたため、すぐに城が落ちたと書かれている。

日蓮宗を信仰していた清正は、肥後に本妙寺を建立している。九州には『統撰清正記』などに見られない記事を有する清正関係の文献があり、『直茂公譜考補』はそれを取り込んだということだろう。『鷹峰群譚』が引く『清正記』も、一般的に知られた『清正記』でなかった可能性がある。

本国寺版をめぐる諸問題

―『録内御書』を中心として―

日蓮正宗教学研鑽所 堀 部 正 円

古活字版研究の先駆者である川瀬一馬は、日蓮宗寺院における古活字版の出版が盛んであった史実を、加藤清正や本阿弥光悦が日蓮宗を信奉していた事実より言及し、本国寺版、要法寺版、本能寺版、下総檀林版の存在を紹介した。

これらのうち、本国寺版は古活字版現存最古の『天台四教儀集解』『法華玄義序』によってその名が知られよう。

本国寺版については川瀬のほか、近時、冠賢一が『日蓮聖人註画讃』の作者日澄と本国寺の関係性などを踏まえて、本国寺版とする見解を披瀝した。その他、本国寺版と伝わる十一点の書籍も列挙・紹介した。本発表では、冠が紹介した諸本を中心に本国寺版の書籍を概観・整理する。

ところで、冠が列挙した本国寺版の中には『録内御書』が含まれる。『録内御書』は、日蓮教団で宗祖滅後古くに蒐集・整理された全一四〇余通の日蓮遺文を指す。現在三種の古活字版『録内御書』が伝わるが、一種のみを本国寺版と特定し、他の二種は本国寺版とは断言できないことを論じる。また、東京都八王子市法忍寺妙義文庫所蔵の古活字版『録内御書』の表紙裏張りから、複数の古活字版の刷りヤレが発見された。発表者は既に『天台法華疏義鑽』と『法華文句随問記』の刷りヤレと紹介したが、不明であった刷りヤレの一紙が『大乘止観法門宗円記』と判明した。これらはすべて同一活字を用いており、この三書はすべて本国寺版と確定できることを紹介する。

本阿弥一族と灰屋紹益

— 吉野太夫の逸話における「父」と「一門」をめぐる —

北海道大学(院) 工藤隆彰

天下無双と称された吉野太夫は、近世を通して多数の著述で取りあげられている。その逸話として最も有名なのは婚姻に際しての出来事で、諸書によって異同はあるものの、吉野の夫(灰屋紹益)が遊女を妻としたことでその父や一門から勘当されるが、吉野の行動によって和解に至るといのが大筋である。

だが、紹益の父として知られている紹由は実際の吉野の退郭に先立って没していることが江馬務『名妓吉野』(芸艸堂、一九二〇年)で指摘され、紹益と父の確執は何らかの誤りであると考えられてきた。

しかし、吉野の逸話を取りあげた諸書を改めて確認すると、そのなかに紹益を勘当した「父」を紹由と明言しているものはない。さらに、紹由は紹益の養父であり、実父とされる本阿弥光益は存命中だった。

そこで今回は、「父」が紹益を勘当した話を記した最も早い著述と思われる近松茂矩の『昔咄』(写本。全十三巻。元文三年に巻七までが成立、追加で巻八・九十が明和五年以前に執筆、巻十一以降は未詳。吉野への言及は巻八にある)における記述と、従来あまり注目されることがなかった光益の素性の整合性、さらに養子に出た後の紹益と光益及び本阿弥一族の関係を検証する。このことにより、紹益を勘当した「父」とは養父の紹由ではなく実父の光益であり、「一門」は本阿弥一族であったことを明らかにする。

天理図書館蔵『源氏物語打聞』の再検討

— 北村季吟とその後裔の古典学をめぐる —

大阪大学(院) 宮川真弥

本発表では、これまで『湖月抄』以前の成立と考えられてきた天理図書館蔵『源氏物語打聞』が、『湖月抄』成立以後に著されたものであることを示し、この資料が季吟およびその後裔の古典学の様相をうかがう上で重要であることを指摘する。なお、『湖月抄』の本文は複数の伝本を比較した上で用いる。

『源氏物語打聞』は、『湖月抄』以前の季吟の学問の様相を示す資料とされてきた(『源氏物語事典』(東京堂、昭35)など)。しかし、本書には「頭書二」「傍書二」と示し、『湖月抄』の頭注や傍注に用いた語句を詳述する注記があるため、『湖月抄』を補完する目的で作成されたものと考えられる。なお、紙背の季吟『徒然草拾穂抄』の反故が、季吟の孫・季任の筆写担当箇所に限られるため、本書の書写者も季任である蓋然性が高い。

本書からは、板行された季吟注へのさらなる施注が継続的に行われ、季吟自身も施注に関与していたことが知られる。また、本書の紙背に季吟『伊勢物語拾穂抄』に関する注釈も見え、施注の対象は『湖月抄』にとどまらなかったものと目される。

これまで季吟の学問は、専ら板本を研究対象として、古注集成にとどまるものと評価されてきた。しかし、板行された季吟の注釈書を季吟らが基礎とし、修学の段階に依じて、板本の記述を詳説したり、板本に記さなかった秘訣を伝えたりしていたことは見逃せない。見過ごされがちであった写本や書入をも包含したかたちで、季吟の古典学の総体を捉えていく必要がある。

賀茂季鷹の人脈と名声

― 季鷹宛書簡を踏まえて ―

同志社大学 神谷 勝 広

上賀茂神社祠官の賀茂季鷹は、江戸時代後期、和歌・国学・狂歌等の分野で活躍した。和歌を有栖川宮家に学び、京・江戸両歌壇と関わりが深い。しかし、従来の想像以上に、広範な人脈を有し高い名声を得ている。

今回、先行研究に新たな資料と季鷹宛書簡(百六通、神谷藏)を絡ませ、和歌・国学の門人を中心として少なくとも全国三十余州に人脈があること、武家(多数の大名、特に歴代の京都所司代)や豪商・豪農(大坂の桜井甚兵衛・津の川喜田夏蔭・駿府の植松与右衛門)と関係が深いこと、狂歌師(江戸の南畝・京都の林鮎主・大坂の三日坊)や歌舞伎役者(中村歌右衛門・大谷友右衛門)や力士(鏡岩)等と交際していること、大量の染筆や序文等の依頼状況から、季鷹へ関心を寄せる人々がさらに多く存在していたこと、などを軸に述べる。

概括すれば、季鷹は、全国規模の人脈を持ち、かつその人脈は、身分あるいは職種(公家・武家・神職・僧侶・豪商・豪農・学者・歌舞伎役者・力士等)的にも、分野(和歌・国学・狂歌・連歌・儒学・漢詩・書・絵画・茶・插花・本草・医学・蹴鞠等)的にも広い。しかも直接的な人脈を超えて、さらに多くの人々が季鷹へ関心を寄せており、それが高い名声へ繋がっている。文芸が社会の中で盛り上がり見せるためには、季鷹のような存在は重要ではないだろうか。

以上から、江戸時代後期の文芸におけるキーパーソンの一人として、季鷹を考えるべきである。

『太平記演義』の二面性

― 冠山の不遇意識を軸に ―

上智大学(院) 丸井 貴 史

岡島冠山『太平記演義』(享保四年刊)は、『太平記』冒頭から巻九の途中までを三十の章段に分け、板面の上段にはその中国語訳、下段には原文を通俗軍談の文体に改めたものを配した作品である。作者が唐話学の第一人者ということもあり、従来は語学的な観点からの研究が主流であったが、本発表では主に叙述の方法に焦点を当て、作品の性格を検討する。

『太平記演義』には『参考太平記』に基づく記述・割注が散見し、冠山は本作に歴史書としての性格を付与しようとしていたようである。しかし、通俗軍談に創作の要素が見られるのと同様、本作にもまた虚構性が確認される。たとえば守山祐弘の手になる本作の序文では、『太平記演義』は自らの不遇を作品に仮託した羅貫中に倣って書かれたと記されているが、李卓吾読忠義水滸伝序によれば、羅貫中の憤りは私憤ではなく公憤である。この改変は、冠山が自らの不遇に対する憤りを作品に投影することの正当性を主張するためのものであろう。実際、冠山は『太平記』に描かれる不遇の人物に対し、原話の記述を改変することで同情や共感を示しているのである。

唐話学において多大な業績を残した冠山も、学識に関して儒者からの評価はさほど高くなかったらしい(『ひとりね』一二六)。そうした状況への反発が、『参考太平記』という学問的な注釈書の利用と、原話の自由な改変という、相反しているかのように見える執筆態度を冠山にとらせたものと考えられる。

大枝流芳の位置

— 香道を中心に —

総合研究大学院大学(院) 武 居 雅 子

大枝流芳(宝永半ばから寛延頃の人)は、香道だけでなく煎茶道など諸芸に秀でた人物である。彼の茶書に関しては既に言及も見出されるが、肝心の香道書について分析はなされてこなかったと思われる。

本発表では彼の香道書を対象として、組香(二種以上の香を焚いて香の異同を判別し、その香名を当てる遊び)やその出典に関して調査結果を述べ、流芳の明風受容に関する諸問題を考えてみたい。具体的には『香道秋の光』『香道千代の秋』(享保十八年刊)、『香道滝之糸』(享保十九年刊)、『香道軒の玉水』(元文二年刊)を精査して、流芳による創作組香の原拠を詳らかにする。さらに『香道秋の光』附録『香志』において、『考槃余事』『遵生八牋』など四十余冊の漢籍が引用されていることを手がかりに、流芳が煎茶や花道書(『抛入岸の波』寛延三年刊)だけでなく、香道においても明風を受容していたことを明らかにする。

組香の原拠は和歌文芸が主流だが、近世中期の唐様流行を背景に、流芳は和製類書『絵本故事談』(正徳四年刊)にも素材をもとめて、彼独自の新しい組香を創作した。流芳はそれらが身近なものとなるように解りやすく小引を記し、組香の仕組みに文芸世界を再現し、遊戯性を加味した。その結果、文芸を読むことよって得られるのとは異なる明風享受を実現したと考えられる。

西村遠里と蕃山学

— 『居行子』『雨中問答』を中心に —

九州大学(院) 吉 田 宰

西村遠里(えんり) 享保三年生、天明七年没。京都の人。市井の天文暦学者として活躍し、後半生においては、『居行子』(明和九年序・安永四年刊)や『雨中問答』(安永五年序・同七年刊)など、多くの随筆類を刊行した。

遠里に関する先行研究としては、彼の天文暦学分野における活動に焦点を当てたものが比較的多いが、一方、彼の随筆類に関しては、浅野三平や日野龍夫などに、わずかな言及があるのみである。中でも日野は、『雨中問答』に儒学者熊沢蕃山の言がしばしば見えるという重要な指摘をした(『雨中問答』解題)、『京都大惣本稀書集成』第十六卷、臨川書店、一九九六年)。

そこで、本発表では従来看過されてきた遠里の随筆類を中心に、遠里と蕃山学との関連性を詳述することを目的とする。特に、蕃山学の根幹にあたる「時処位」の思想、及び「道」と「法」の区別などが、遠里にも受容されていることを明らかにする。また、彼の有した天文暦学の知識が、こうした蕃山学の受容を容易にしたであろうことも併せて述べる。さらに、遠里の説く心の修め方が陽明学的理解に基づいていることも指摘する。本発表は近世中期の俗間教訓書において、蕃山流の心学をその思想的中心の一つとして考える中野三敏の提唱『戯作研究』、中央公論社、一九八一年)を補強しつつ、蕃山学が算学や天文暦学といった実践的学問とどのように結びついたのか、その一端を明らかにするものでもある。

藤森弘庵『春雨楼詩鈔』と幕末の出版検閲

東京大学大学院学術研究員 佐藤 温

幕末の儒家藤森弘庵の詩集『春雨楼詩鈔』（嘉永七年〔安政元年〕刊）には、一部が削除された版本が存在する。これらは削除の多寡で二種類に分類され、先に望月茂氏が『藤森天山』（藤森天山先生顕彰会、一九三六年）にて、時事を諷した箇所が林家の関与した検閲で段階的に削除された結果を反映していると推定したが、残存する諸本を検討すると、それぞれ検閲による削除を経たもの（ア）と、その後明治初期に削除箇所を大部分修正したものの（イ）として区別するのが妥当と考えられる。

この（ア）の成立に関わる検閲は、新たに確認された同時代の関係者による回想・証言からも、林家（昌平坂学問所）の主導のもとで安政四年頃までには行われたと見られ、全四八一首中二三首の詩と、例言や評語などの一部が、部分的または全体的に削除されている。削除対象の詩を分析すると、この検閲は主に嘉永期頃の海外勢力の接近に関わる事柄や人物を類推させる語句・表現の有無を基準としていたことがわかる。

弘庵は当該の詩において、攘夷が断行されない政局への非難や海防への懸念を詠んでいるが、これらの批判は当時の対外政策に関与していた林家によって大きく問題視されたと考えられる。実際、該書ではかろうじて対外情勢との関わりを連想できる程度の作が削除された例も見られ、そこから本発表では、この検閲が当時攘夷家として声望を高めていた弘庵の時局への影響力を強く警戒した結果為されたものであることを論じる。

「祇園祭礼信仰記」考

— 人形浄瑠璃における秀吉像をめぐる —

日本学術振興会特別研究員（P D） 原 田 真 澄

中邑阿契・浅田一鳥ら作「祇園祭礼信仰記」（宝暦七年豊竹座初演）は、歌舞伎・人形浄瑠璃ともに上演頻度が高く、四段目「金閣寺」が特に有名である。本作は、「金閣寺」の大道具の仕掛けとともに、真柴久吉（史実の豊臣秀吉の首（かしら）を高台寺の秀吉像を模して作製した（『浄瑠璃譜』）ことでも知られる。現在は「金閣寺」のみの上演も多いが、秀吉と旧主松下嘉兵衛（之綱）との対立葛藤を描いた三段目「是斎住家」は、曲が伝承されており、文楽の舞台でも演じられている。また「是斎住家」には、太閤記物の先行作である近松門左衛門作「本朝三国志」（享保四年初演）、竹田出雲作「出世握虎稚物語」（享保十年初演）などの影響が指摘されている。

この「是斎住家」には、唐風の冠に「白袍に紫の指貫」を着した久吉が登場する。近年、高台寺の秀吉像が、白い衣に藤色の袴を着けた造立当時の姿に復元された。復元された秀吉像と本作における装束の描写や初演時の絵尺しを比較すると、本作では首だけでなく衣裳でも高台寺の秀吉像を再現しようとしたと考えられる。本作は、太閤記物の先行作を参考にしつつも、より「リアル」な新しい秀吉像を観客に提示し、それが受け容れられて現在まで受け継がれていると言えよう。

本発表では、後の太閤記物流行の先駆けと位置づけられる「祇園祭礼信仰記」に表われた秀吉の人物造形と表象について、戯曲内容と視覚的要素の両面から考察する。

芍薬亭長根の読本における「勸戒」

―『坂東奇聞 濡衣雙紙』を中心に―

川村学園女子大学 山 名 順 子

文化五年（一八〇八）春に出版された芍薬亭長根の読本『坂東奇聞 濡衣雙紙』は、長根の読本三作品の第一である。序文中、長根は当時の読本のあり方を嘆じ、「命名」「国風」「勸戒」「議論」「野史」の五つの要素を挙げ、それらすべての要素を持つ本作を出版することの意義を謳う。

本報告では、これらの要素のうち特に「勸戒」に注目し、長根の言う「勸戒」が、文化五年当時に馬琴が提唱していた「勸懲」と大きく異なることを確認する。本作では、鳴門寛一の妻雪児が、名香濡衣を紛失したことを隠したために発生した疑惑と誤解を発端とする一連の事件が描かれる。寛一は妻の不義を疑い、その誤解は寛一夫妻の惨死を招く。寛一の弟退二は、兄嫁の「不義」の相手燕二を追い、敵討を完遂する。しかし、不義自体が存在しない以上、この敵討で「勸懲」が全うされることはなく、「勸戒」と「勸懲」が異質のものであることが窺える。

天野聡一氏は「勸戒」を士分としての規範とし、「勸戒」と作中の「議論」との関連を指摘した（『大田南畝の読本観』）。一方、本報告では、作中に描かれる人々の死の因果が不明瞭である点に注目する。これらの死は馬琴の読本に描かれた明確な悪を因果とするものではなく、人の心の働きによって発生した卑小な悪や過失による不幸な死にすぎない。ここから、長根のいう「勸戒」は、人の心を「戒」めることを目的としたものであると考える。

『報仇高尾外伝』における為永春水の創作態度

早稲田大学(院) 長 田 和 也

『報仇高尾外伝』は天保十四年正月二十日序、為永春水晩年の半紙本型読本である。神保五彌氏は同作を、春水が講釈師の体験を活かして「人情本作者の元祖と名のつた戯作者としての姿勢」を示すために著したものであると論じた（『人情読本』「論」）（『為永春水の研究』昭和三十九年二月、白日社）。

同作に曲亭馬琴の『標注園の雪』及びその典拠である『通俗金翹伝』が利用されていることや、高尾に関する春水の考証及び口絵の発句の効果についてはかつて論じた（『報仇高尾外伝』の方法）（『江戸風雅』第九号、平成二十六年六月）。

本発表では更に、洒落本としては異例の伝奇的作風で知られ、文政九年に春水自身が嗣作した田にし金魚の『契情買虎之巻』（安永七年序）と、振鷲亭の中本型読本『本朝別女伝』（寛政十年刊）からの影響を指摘する。また本作には、馬琴が多用したことが指摘される親子の血が融合する趣向（中尾和昇『馬琴小説における趣向の往還―「血合わせ」を手がかりに―』（『日本文学』平成二十六年十一月、日本文学協会））も用いられている。

春水は天保十二年十二月に手鎖の処分を受けた。しかし彼は死に至るまで創作意欲を抱き続けていたのである。その証左と言える本作について、種々の趣向の機能を考察してゆきたい。

国文学研究資料館博士研究員 紅 林 健 志

建部綾足は明和七年（一七七〇）に『とはしぐさ』を刊行する。『片歌道のはじめ』（宝暦十三年（一七六三）刊）、『片歌二夜問答』（同年刊）、『百夜問答』（明和二年刊）、『百夜問答二篇』（同四年刊）に次ぐ、五作目の刊行片歌論書だが、『片歌道のはじめ』を除く、先行の四書が、すべて門人の問いや他派からの論難に綾足が答える形式で書かれていたのに対し、この『とはしぐさ』では、広く世間に問いかける形式をとる。従来注目されてこなかったが、先の四書で、答える側という、やや受動的な立場にあった綾足が、本書では問いかける側に立ち、能動的かつ積極的に片歌説の意義を論じた点に特色がある。片歌説への批判に反転攻勢を仕掛けようとの意図が見てとれる。

本発表では『とはしぐさ』の内容を検討し、綾足がたどり着いた片歌説の完成形を明らかにする。綾足は、賀茂真淵等の歌論を援用し、「太平の御代」にふさわしい文芸として、片歌の意義を強調する。「太平の御代」にふさわしい片歌とは、かつて田中善信氏が指摘された「平明な中に雅味のある作風」（綾足の片歌について）、「近世文芸研究と評論第二〇号」に他ならない。ただ、その作風を提唱するにあたって、綾足の中に逡巡もあった。そのことも本発表で指摘する。

さらに、『さだま草』（明和八年刊）や『とはしぐさこたへ』（同七年序）、韓国国立中央図書館所蔵の書人本など、諸家の反応をとりあげ、綾足の議論の享受の諸相にも言及する。

広島大学 久保田 啓 一

佐佐木信綱の紹介と正岡子規の推奨を経て、近世末期の地方歌人としては異例の扱いを受け続けた橘曙覧の評価が、近世和歌研究の立場では常識に属する手続きを経てなされたものではないことは、『和歌文学大系 布留散東 はちすの露 草徑集 志濃夫廼舎歌集』（明治書院 二〇〇七年）の「志濃夫廼舎歌集」解説ですでに指摘したところである。昨年、俳諧の歳旦帖の形態を模したわらや社中の和歌刷り物が福井県文書館によって見出され、漸く福井歌壇と曙覧の関係を検討する必要性が認識されるに至ったのを機に、福井藩の文学資料に見える曙覧関連記事を整理して紹介し、曙覧が同時代の福井歌壇で後援者や福井藩士との交流をもとに立場を獲得する過程を辿ることとした。

依拠する資料は、福井県文書館が管理する松平文庫所蔵『文藻雅集』その他である。特に『文藻雅集』は松平慶永とその側近が手元において逐次書き継いだ文学関係手控えと見られ、ほぼ年代順に記事が並ぶので、時期を推測することができる。先述の新出刷り物の一部も写し取られており、慶永やその周辺も関心を持って手にした可能性が高い。わらや社中が直接の手本としたと思われる、福井の富豪山口清香を中心とする白梅窓社中の活動記録も収録し、曙覧の新出和歌をも豊富に有する同書の価値は高い。慶永や重臣との個人的な繋がりだけが注目されがちであった従来の曙覧像を修正しつつ、人脈と和歌表現の両面から曙覧を相対的に福井歌壇の中に位置付けることを試みる。

MEMO

■ アクセス

【JR】

上野駅・鶯谷駅 下車徒歩 10 分

【地下鉄】

銀座線・日比谷線上野駅 下車徒歩 15 分

千代田線・根津駅 下車徒歩 10 分

【京成電鉄】

京成上野駅 下車徒歩 15 分

【都営バス】

上 26 系統(亀戸↔上野公園) 谷中バス停 下車徒歩 3 分

【台東区循環バス】

東西めぐりん東京芸術大学バス停 下車すぐ

